心身科学 第８巻第１号（89–97）（2016）

風景構成法における人物と自我同一性の関連

作元　志穂*1）　齋藤　眞*2）

本研究では，自己概念の変化が起こる青年期の課題である自我同一性の確立と風景構成法（LMT）との関連について，描画空間の中への自己像の位置づけ・LMT における人物の描かれ方・LMT 作品の全体的な印象と人物の印象という３つの視点から仮説を立て，その特徴が LMT の人物にどのように表れるかをつかむための検討を行った．仮説は，１）自我同一性が確立している人は未確立の人より，「風景の中に自分がいる」と回答する人が多い，２）自我同一性が確立している人は人物を具体的に描く，３）作品全体と人物がともによい印象を与える LMT 作品を描く人は，自我同一性が確立している，であった．

調査１で，大学生を対象に LMT と自我同一性の特徴を捉える２種の質問紙を用いて，その特徴を検討した．調査２では，LMT 作品の印象調査を行った．その結果，仮説２），３）は支持されたが，仮説１）は支持されなかった．自我同一性確立傾向群（確立群）では，人物が通常の身体を伴った形態で具体的に大きくはっきりと描かれ，LMT 作品全体の印象として，まとまりや充実感を与えるという特徴が示された．「私」が確立されているため，自己を象徴する人物を明確に表現することができ，内的世界へ統合されたのと考えられる．自我同一性混乱傾向群（混乱群）では，記号化・省略された人物に彩色をするという表現が目立った．自我同一性確立中間群（中間群）でも，記号化・省略がみられたが，白抜きのままで描かれているものが多かった．このことから，「塗る」という点で双方の描く人物には質的な違いがあり，混乱群の人物には形がはっきりしないが彩色を加えるという方法で，自己のズレや葛藤が表現されたのだと考えられた．

仮説１）に関わっては，同一性確立の度合いに関係なくほとんどの調査協力者が「風景の中には自分はいない」と回答していたが，その風景に自分は「関与している」と答える者が多かった。先行研究でも示唆されているように，世界に自分を位置づけてゆくという心理学的課題に対して青年がどのように向き合おうとしているか，その関与の仕方とそこでの自我の強さを査定するのに重要な手がかりをもたらす可能性が推測された．

キーワード：風景構成法(LMT)，風景の中の人物像，風景の中の自己，同一性混乱尺度,青年期

Ⅰ．問題と目的

山や川，田が広がり，家や木々が立ち並ぶ道をゆっくりと歩く人がいる．このような風景を誰もが一度は描いたことがあるのではないだろうか．風景画は，描く人によって同じ場所とは思えないような絵であったり，同じ人でも違った場所に思えることがある．風景とは，自分と周りのものとの関係によって生起される世界であり，自分のもつ主観的な感情を伴って初めて成立する．つまり，風景を描くということは，その人自身の感情や心理的空間を映し出すことであり，心の中を垣間見ることのできるものなのである．

このような風景の特徴を利用した描画法に風景構

＊1）愛知学院大学大学院心身科学研究科心理学専攻
＊2）愛知学院大学心身科学部心理学科
（連絡先）　愛知学院大学心身科学部心理学科　齋藤眞研究室

成法（The Landscape Montage Technique：以下，LMTと略記）がある．LMTとは，1969年に中井によって創案された描画法のひとつである．精神科治療，心理臨床や教育相談など，様々な臨床実践領域で用いられており，その後の研究も発展している．

LMTの描き手は，大景群（川・山・田・道），中景群（家・木・人），小景群（花・動物・石や岩）からなる10個のアイテムと「何か足りないと思うもの」とを施行者（見守り手）の教示に従い，自由に構成していく．そして，構成された心理的空間に色を付けることで，その人自身の感情を伴った，心的・内的世界を投影するといえる．

LMTの構成アイテムのうち，人物はもっとも描き手自身に近く，自己を意識しやすいものである．LMTにおける人物の読み取りについて，皆藤（1994）は，「風景の中の人物像」と「風景の中の自己像」という独自の概念を提示している．「風景の中の人物像」とは，「人物」の項目において描かれた人物について，その空間的位置や動きという要因から検討する項目をいう．これに対して「風景の中の自己像」とは，“この風景の中にあなたがいるとしたらどこにいるか，いたいか．そこで何をしているか”という質問に対して，自己を意識的にその描画空間に置く作業への応答のことをいう．ここには，描いた風景を自分の世界だと受けとめる作業と，次にその世界に自分を改めて位置づけるという「二重の心的作業」が求められているという．そして皆藤は，統合失調症者と青年期女子の比較検討から，健常者は自己像を「動物」の近くに位置づける可能性があるのに対して，統合失調症者は自己像を「家」の中に位置づける可能性があることを示唆している．さらに，自己像を風景の中に位置づけるという心的作業が，内的世界との距離に安心感をもてない情況からの変化を示すという意味で，心理療法の経過を反映する指標ともなり得ると考察している．

この研究を参考に河西ら（1995）は，風景の中に自己を含めた「人物」をいかに表現し，定位させているかに焦点をあて，1）人物の形態と表現，２）人物の位置，３）人物と風景の調和度・共感度，4）人物像を通してみた自我関与の４つの側面から統合失調症者と青年期女子の違いを検討している．その結果，健常者による人物では線画は少なく他のアイテムとの関連もあるのに対して，統合失調症者による人物は線画で描かれることが多く，しかも風景の中の他のアイテムとの関係性もあまり感じられなかった．ここには，統合失調症者における「身体像も含めた自己像」の不確かさが表現されている可能性があること，また，河西らが調査対象とした健常者では職業的同一性も実感できている者が多い可能性が考察されている．

皆藤や河西らの研究から，LMTにおける自己像や人物の表現形態・動きに着目することは，描き手の内的状況や，自己および周りとの関係性の読み取りを可能にするといえる．このように考えると，下記のような自我同一性との関連がうかがえる．

心の中には，自分では意識できない漠然とした感情や思考がしばしば存在する．特に青年期では，身体的・心理的変化が急激に進み，変化する自分や自分の状況への戸惑いや葛藤が多く，言葉に表現できない感情が増えてくる．

青年期は子どもから大人への移行の時期であり，身体的な変化とともに心の構造が急激に変化するため，「第二の誕生」ともいわれ，急激な自己概念の変化が起こる代表的な時期である．この時期にぶつかる発達課題として，自我同一性の確立があげられる．自我同一性の確立とは，自分が斉一性・連続性をもち，他者とは異なる独自の存在であると認識し，自己を安定して保てている状態のことである．

就職活動などを通し，自分自身を模索することを迫られる大学世代は，自我同一性確立の仕上げ段階といえる．自分と社会との間で，自分の立ち位置をどのように決断するのかが重要な課題となる．この決断をするにあたり，社会的に期待される規範と自分自身とのズレは自我同一性の混乱を引き起こす．自我同一性の混乱とは，自分を見失い，深い不安にさらされている状態である．この混乱は，社会や周りのものとの関係やその中での立ち位置や自己の心の中での立ち位置の決断を迷わせるものである．

この迷いや葛藤は，“自分が何者かわからない”という，自己の認識や表現のできなさから生じるものだと考えられる．自己を認識できない，自分にズレがある，という自我同一性の混乱の状態は，統合失調症者の自己の認識のできなさにも共通する部分があると考えられる．

「風景の中の自己像」やそこでの自我関与というのは，心的空間や周りとの繋がりが意識される風景の中に，意識された自己を位置づけるということであり，この行為は自分の中にある「私」を統合し，自分を確立していく自我同一性確立の過程と共通する部分があると考えられる．ゆえに，自我同一性確立の過程でおこるズレや混乱は，心的空間のありようがイメージとして表現されるLMTの作中に，より端的に表れると

考えられる．人物をどのように描くのか，自己を位置づけることができるのかに迷いが生じた場合, それは, 自分自身の心理的 / 社会的な位置づけを見失っているのだといえる．

また，青年期の特徴として，人物を線画（棒人間）で描くことがあげられる．河西らによれば, 線画は「自分を記号化して描くような一種の防衛手段」であり，職業的同一性の確認などを通じて自己を個別化された者として実感できると，そのような防衛でごまかさずにいることができるようになる可能性が示唆されている．つまり，自我同一性が確立している人の人物は，より具体的に描かれる可能性がある．

自己の表現に使われる媒体は，人物画や自画像だけではない．それ以外の描画や面接の応答，他の心理検査においても何らかの形で自己表出しているものである．LMT においても，自己を表すものは人物だけではない．作品全体がその人の心的空間を象徴するように, それ自体が自己を表している．そこで本研究では, SD 法によって作品全体の印象と人物の印象をとらえることした．統合された，安定感のある印象をもたらす絵は，自己が統合され，安定に保たれているという心の状態を投影しているのだといえる．また，その空間にいる人物が堂々と描かれることは，そこに自分の居場所を確立していることを意味するといえる．

以上から本研究では，1）自我同一性が確立している人は，未確立の人より，風景の中に自分がいると回答する人が多い，2）自我同一性が確立している人は，人物を具体的に描く，3）作品全体と人物がともによい印象を与えるＬＭＴ作品を描く人は，自我同一性が確立している，という３つの仮説を立てた．本研究では，この仮説の検証を中心に，LMT における人物に表れる自我同一性の特徴をつかみ，LMT の読み取りに関する理解を深めることを目的とする．

Ⅱ．方法

1．調査１

調査協力者はＡ大の１～４年生51名（平均20.5歳, 男性22名, 女性29名／１年生８名，２年生５名，３年生11名，４年生27名）であった．調査は，Ｘ年５月～６月上旬に一対一の個別で行った．LMT の実施とともに，２種類の質問用紙に回答してもらった．

質問用紙の質問項目は，自我同一性を測る尺度として，砂田（1979）の「同一性混乱尺度」を用い，LMT 実施前に回答してもらった．この34項目について，「はい・いいえ・どちらでもない」の３件法で回答してもらった．また河西らの研究を参考に，LMT 全体の説明および人物の年齢や動き，自分の有無など，絵の内容に関する質問用紙（12項目）を作成し，LMT 完成後に自由回答してもらった．

2．調査２

調査協力者はＢ女子大学の３，４年生39名（平均20.8歳，３年生27名, ４年生12名）であった．調査は，Ｘ年９月下旬に集団で一斉に行った．調査１で集まった51枚の LMT 作品に対して，SD 法による印象調査を行った．

絵の統合性や充実感を見るため，「全体的印象」として「調和した／不調和な」・「濃い／薄い」・「にぎやかな／さびしい」の３項目，「人物印象」として「大きい／小さい」・「堂々とした／頼りない」の２項目，計５項目で作成した独自の質問を用いて，７段階で評定してもらった．

3．結果の処理

1）人物について

人物の形態について，河西らの「通常の身体を伴っているか，線画で描かれているか」という分類をさらに細かくし，以下の５種の型に分類した．

① Normal 型（Nor 型）

人物の形態が通常の身体を伴っており，彩色もしっかりされているグループ．

② Empty 彩色型（EmpA 型）

輪郭ははっきりしており，身体の膨らみもあるが，通常のものより省略がされているグループ．彩色はされている．

③ Empty 無色型（EmpB 型）

輪郭ははっきりしており，身体の膨らみもあるが，省略されているグループ. 彩色がされず, 白抜きになっている．

④ Stick Figure 彩色型（S.F.A 型）

線画（棒人間）で描かれており，彩色がされているグループ．

⑤ Stick Figure 無色型（S.F.B 型）

線画（棒人間）で描かれており，彩色がされていないグループ．

その結果, Nor 型９名, EmpA 型９名, EmpB 型８名, S.F.A 型６名，S.F.B 型19名となった．

２）同一性混乱尺度について

同一性混乱尺度得点は，「はい」を２点，「いいえ」を０点，「どちらでもない」を１点として，総点を算出した．その結果，平均32.29点（SD=9.97），最大58点，最少15点であった．得点の分布が正規分布ではなかったため，点数が低い方から上位15名を同一性確立傾向群（以下，確立群と略記），下位14名を同一性混乱傾向群（以下，混乱群と略記），それ以外の22名を同一性確立中間群（以下，中間群と略記）とした．各群の平均と標準偏差を表１に示す．

３）絵全体と人物の印象評定について

SD 法での印象評定の結果を１～７点で得点化し，それを基に３つのグループに分類することにした．

得点化について,「調和している」「濃い」「にぎやか」「大きい」「堂々としている」を７点,「調和していない」「薄い」「さびしい」「小さい」「頼りない」を１点として，各項目の平均点を出した（表２）．

各項目において，平均値より１点以上高い評価の絵を「調和している」「濃い」「にぎやか」「大きい」「堂々としている」（高印象群）と分類し，１点以上低い絵を「調和していない」「薄い」「さびしい」「小さい」「頼りない」（低印象群）と分類した．平均値より，±1 点未満の絵は中間（中間印象群）として分類した．以上の処理を経て３グループに分類した．その結果，高印象群６名，低印象群５名，中間印象群40名となった．

表1　同一性混乱尺度得点の各群の平均・標準偏差

	全体	確立群	中間群	混乱群
平均	32.29	20.73	32.36	44.57
SD	9.97	3.03	2.90	6.51
人数	51	15	22	14

表2　印象評定の各項目の平均と標準偏差

印象評定の項目	全体平均	SD
大きい／小さい	3.04	1.1
堂々とした／頼りない	3.30	1.0
調和した／不調和な	4.05	0.7
濃い／薄い	4.36	1.0
にぎやかな／さびしい	3.82	0.8

Ⅲ．結果

１．LMT における人物と自我同一性の関連

同一性得点群（確立群，中間群，混乱群の計３群）と LMT における人物の諸項目について，関連があるかを調べるために，χ^2検定を行った．期待度数が５以下のセルがある場合や度数０のセルが１つでもある場合には，Fischer の直接確率計算法を行った．

１）自己像

同一性得点群と自己像の有無に関して，直接確率計算法による両側検定を行ったところ，有意な偏りはみられなかった（表３）．

２）人物の形態

同一性得点群と人物の形態に関して，直接確率計算法による検定を行ったところ，度数に有意な偏りがみられた（p=0.008，両側検定）．確立群には Nor 型の人物が多く，S.F.B 型が少なかった．中間群には EmpB 型と S.F.B 型が多かった．混乱群には EmpA 型と S.F.A 型が多かった（表４）．

３）人物の彩色

同一性得点群と人物の彩色の有無に関して，３×２のχ^2検定を行ったところ，度数に有意な偏りがみられた（$\chi^2(2) = 6.44$, $p < .05$）．確立群では，人物彩色する者が多く，彩色しない者が少なかった．中間群では，人物に彩色しない者が多く，彩色する者が少なかった．混乱群に差はみられなかった（表５）．

２．絵の印象と自我同一性の関連について

絵の印象によって自我同一性混乱得点に差があるかどうかの検定を行うために，印象評定群（高印象群，中間印象群，低印象群の計３群）を独立変数，同一性混乱得点を従属変数とした一要因分散分析を行った．その結果，群間に有意な差がみられた（$F(2,48)=3.30$, $p<.05$）．Bonferroni による多重比較を行ったところ，高印象群の同一性混乱尺度得点は中間印象得点に比べて低かった（$p<.05$）．また，高印象群と低印象群，中間印象群と低印象群の間には有意な差はみられなかった（表６，図１）．

表3 同一性得点群と自己像のクロス表

			自分		
			いない	いる	合計
同一性得点群	確立群	度数	13	2	15
		期待度数	13.2	1.8	15.0
	中間群	度数	19	3	22
		期待度数	19.4	2.6	22.0
	混乱群	度数	13	1	14
		期待度数	12.4	1.6	14.0
合計		度数	45	6	51
		期待度数	45.0	6.0	51.0

表4 同一性得点群と人物の形態 のクロス表

			人物の形態					
			Nor	Emp A	Emp B	S.F. A	S.F. B	合計
同一性得点群	確立群	度数	6*	4	1	1	3*	15
		期待度数	2.6	2.6	2.4	1.8	5.6	15.0
	中間群	度数	2	1	6*	1	12*	22
		期待度数	3.9	3.9	3.5	2.6	8.2	22.0
	混乱群	度数	1	4	1	4*	4	14
		期待度数	2.5	2.5	2.2	1.6	5.2	14.0
合計		度数	9	9	8	6	19	51
		期待度数	9.0	9.0	8.0	6.0	19.0	51.0

＊は有意な偏りが推測されるセル

表5 同一性得点群と人物の彩色 のクロス表

			人物の彩色		
			なし	あり	合計
同一性得点群	確立群	度数	4*	11*	15
		期待度数	7.4	7.6	15.0
	中間群	度数	15*	7*	22
		期待度数	10.8	11.2	22.0
	混乱群	度数	6	8	14
		期待度数	6.9	7.1	14.0
合計		度数	25	26	51
		期待度数	25.0	26.0	51.0

＊は有意な偏りが推測されるセル

表6 印象評定によるグループと自我同一性混乱尺度総点の平均

グループ	度数	平均	標準偏差
高印象群	6	23.0	6.2
中間印象群	40	33.7	10.2
低印象群	5	32.0	5.5

Ⅳ．考察

1．風景の中の自分

同一性得点と自己像の有無に関連があるかどうかの検定を行った結果，有意な偏りは認められず，仮説１）「自我同一性が確立している人は，未確立の人より，風景の中に自分がいると回答する人が多い」は支持されなかった．

しかし，河西ら（1995）を基に，自我関与という視点からカテゴリー分けをすると，本研究の調査協力者の特徴を示すと考えられる点が見受けられた（表７）．

「（風景の中に自分は）いない」という回答の内訳で，“自分は何をしているか”という質問に対し，絵の中には自分を位置づける「関与」を示した者が45名中36名であった．

河西では，この「関与」は統合失調者に多く，青年期女子は「傍観者」的な態度を示す者が多かった．「傍観者」的な態度とは，“この絵を見ている”など，自分を絵の外に位置づけていることを意味する．この結果について，統合失調症者の自我境界のもろさや自我防衛の弱さと関係しているという考察がされている．これは，本研究の調査協力者に「関与」を示す者が多い可能性が考えられたことと，矛盾するように思われる．

そこで，統合失調症者の「関与」と本研究の調査協力者の「関与」の意味の違いを考えたい．自我境界のもろさや自我防衛の弱さによって，LMT 作品への距離を見失っていることが，「（受動的）関与」という表現に示されているとすると，統合失調症者は，LMT 作品の世界に“まきこまれた”状態であると考えられる．一方，本研究の調査協力者は，一般の大学に通う普通の学生である．自我同一性が混乱傾向にあるといっても，その程度は通常の範囲内であるといえる．そのため，自我境界や自我防衛に病理的な部分はほとんど無いと考えられる．つまり，LMT 作品に“まきこまれた”状態とはいえず，LMT 作品と現実世界を区別しながら，自らの意志で「関与」しているのだと考えられる．自我を守りつつも，心的空間に入り込み，自己の内側を見渡しているのではないだろうか．つまり，本研究の調査協力者の「（能動的）関与」は，自我防衛の強さや心の健康を表すものなのだと考えられる．

以上のことを踏まえると，「風景の中の自己像」や自我関与というのは，自我同一性との関連ではなく，心的エネルギーの強さや健康度をより顕著に表すという可能性が考えられる．また，一般大学生を対象とする本研究では，臨床群との比較ほどの差がみられなかったとも考えられる．上記のように，青年期の調査協力者なりの防衛的な動きが背景にあったために，仮説１）が支持されなかったのかもしれない．

2．人物の具体化

同一性得点と人物の形態に関連があるかどうかの検定を行った結果，自我同一性が確立している人は，人物を記号化・省略することが少なく，具体的に表現する者が多いことが分かった．よって，仮説２）「自我同一性が確立している人は，人物を具体的に描く」は支持された．自己の象徴である人物をより具体的に表現できるということは，「私」をより明確にイメージ

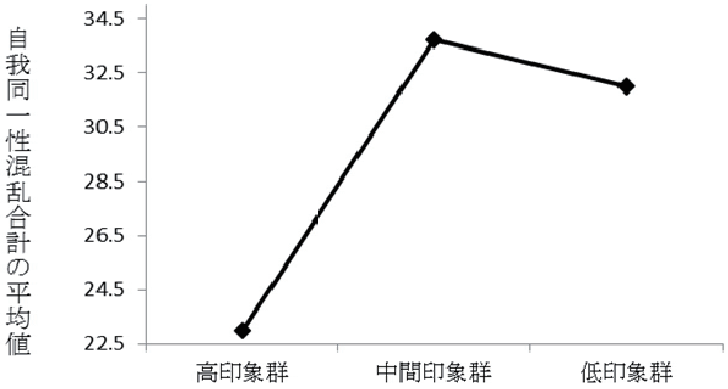

図1　印象評定によるグループと同一性混乱尺度得点の平均

できているということである．それは，自己の個別化が成り立ち，自分自身の存在をはっきりと安定して保てているということであり，自我同一性が確立されていることを表現しているといえる．

また，中間群ではEmpB型とS.F.B型，混乱群ではS.F.A型が多く，人物の記号化や省略が目立った．人物の記号化や省略は，自己を表現できないことへの一種の防衛が作用しているといわれている．このため，自我同一性の確立が完全にされていない，模索段階である描き手の状況を表しているのだと考えられる．さらに，ラポールが十分にできていない中での個別調査のため，施行者が過剰に意識され，その施行者に対する警戒が，特に自己を意識させる「人物」の隠蔽という形で表されたのだとも考えられる．

3．絵の印象

絵の印象によって同一性混乱尺度得点に差があるかどうかの検定を行った結果，高印象群の得点が中間群に比べて自我同一性の混乱度が低いことが分かった．よって，仮説３）「作品全体と人物がともによい印象を与えるLMT作品を描く人は，自我同一性が確立している」は支持された．

高印象群の特徴として，全体的に濃く，にぎやかなまとまりのある絵，人物が大きく堂々と描かれているという点があげられる．これは，描き手の心的空間に安定感・充実感があるということがLMT作品に表現された結果なのではないだろうか．また，その世界に自分自身を象徴する人物を大きく堂々と描くということは，心的空間の中にはっきりと「私」を存在させることを意味する．それは，安定した自己を心的空間に位置づける，自我同一性の確立と共通した特徴を示しているといえる．

しかし，有意な差が認められたのは中間群との比較であり，低印象群に対して有意な差は認められなかった．また，平均値をみると，中間群・低印象群の同一性混乱尺度得点は全体平均とあまり変わらなかった．つまり，よい印象を与えるLMT作品を描く人は自我同一性が確立しているといえるが，よい印象を与えないLMT作品を描く人の自我同一性が混乱しているとはいえない．よって，仮説３）は支持されたが，LMT作品の印象の程度が自我同一性の特徴を明確に示すとは，一概にはいえないだろう．

表7 自我関与の度合い

		確立群	中間群	混乱群	合計
いる		2	3	1	6
いない	関与	11	16	9	36
	傍観者	2	2	2	6
	作者	0	1	1	2
	その他	0	0	1	1

4．人物の彩色

同一性得点と人物の彩色について有意な関連がみられた．

人物の彩色について，確立群には彩色する者が多く，彩色しない者が少ない，中間群には彩色する者が少なく，彩色しない者が多かった．混乱群については，目立った偏りはみられなかった．このことから，自我同一性の確立と人物の彩色の有無は，直接的には関係しないが，自我同一性が確立している人は人物を塗るという特徴があるといえる．

しかしこれは，混乱群の人物形態には線画に彩色したS.F.A型を描く人が多いということと矛盾を感じさせる．このように矛盾した結果となった理由として，彩色における質的な意味の違いについて下記のように考察したい．

人物の形態に通常の身体を伴ったNor型が多い確立群は，人物がはっきりと確立しているため，彩色もされやすいといえる．一方，混乱群は記号化された人物に彩色を行っている．中間群での記号化された人物が自我同一性の確立過程や防衛的な作用を示す特徴であるのなら，記号化された人物に色を付けるというのは，自我同一性の混乱に陥っていることを表しているのではないだろうか．彩色段階で表現されようとした自己やその感情と，はっきりと確立していない状態の「私」のイメージにズレが生じていることを表していると考えられる．ゆえに，混乱群の彩色と，「私」のイメージとしてはっきりと確立された人物を描く確立群の彩色とは，上記のような質的な意味の違いがあるのだといえる．

5．総合考察

LMTと自我同一性との関連について立てられた３つの仮説のうち，仮説２），仮説３）は支持された．このことから，自我同一性が確立している人のLMTの特徴として，1）人物がはっきりと具体的に描かれる，２）LMT作品全体や人物の印象に，統合性や安定感・充実感がみられる場合，自我同一性が確立している傾向にある，という点があげられる．

仮説1）が支持されなかった理由として，自己像や

自我関与は自我同一性との関連よりも，描き手の自我の強さや健康度との関連が強いことが考えられる．今後の課題として，臨床群との比較による特徴を掴むことが考えられる．

以上のことから，LMT における人物像が自我同一性の確立や内的状況を投影すること，自己像が自我同一性との関連よりも，描き手の自我の強さなどの内的世界の読み取りに重要である可能性が示唆された．

Ⅴ．反省と今後の課題

LMT は描き手の心的・内的空間をイメージさせるものである．ゆえに，風景を構成する過程や作品全体からの読み取りが，描き手を理解するためには重要である．つまり，LMT におけるアイテムを個々で解釈するよりも，各アイテムの繋がりを通して全体的に解釈していくことが必要なのである．これを配慮し，本研究では人物像の描かれ方のほかに，全体の印象との関連も分析した．しかし，人物像の位置や他のアイテムとの関連・比較については検討を行っていない．

また，彩色過程でも人物の彩色の有無に違いがみられた．彩色にも感情や自己が表出されるため，重要だと考えられる．さらに，印象の違いは彩色の仕方に大きく影響されると考えられ，LMT 作品の印象に違いが認められたということは，彩色にも違いがみられることを予測させる．

さらに，本研究では同一性混乱尺度得点を群分けの指標として用いた．このため，８つの下位概念を視点とした読み取りを行わなかった．８つの下位概念の視点から各群の LMT 作品を比較することにより，より特徴を捉えやすくなると考えられる．

今後，人物像の位置や他のアイテムとの関係･比較，彩色過程，同一性混乱尺度の下位概念に着目することによって，自我同一性との関連や描き手の心的世界の読み取りに適した特徴をさらに捉えることができると考えられる．また，病院での調査で臨床群と比較することにより，その違いは明確になるだろう．仮説１）で考察された，自我の強さという視点からの分析も臨床群との比較でより可能性が高まるだろう．さらに，自我同一性確立の課題に取り組み始める中学生や高校生，自我同一性が確立されたと考えられる成人期より上の世代などとの比較研究により，特徴をつかみやすくなることが推察される．

引用・参考文献

青木繁伸（1995）．Fisher's exact test（Extended）　おしゃべりな部屋（プラネタリウム，星，植物，熱帯魚，統計学）2002年５月15日〈http://aoki２．si．gunma-u．ac．jp/index．html〉（2014年10月24日）

皆藤章（1994）．風景構成法　誠信書房

河西恵子・伊志嶺美津子・千葉智子・櫃田紋子（1995）．風景構成法における臨床的基礎研究：青年期女子と精神分裂病者の人物像に関しての一考察　横浜女子短期大学研究紀要10，31–42

松井華子（2009）．風景構成法の彩色過程研究の可能性について　京都大学大学院教育学研究科紀要 55, 215–225

中島義実（1995）．風景構成法に関する基礎的研究：施行形態をめぐって　名古屋大學教育学部紀要 42, 235–236

日本描画テスト・描画療法学会（編）（1992）．臨床描画研究Ⅶ　特集 描画における自己像　金剛出版

仁里文美（1994）．「木」のテストの指標とその意味　山中康裕・岡田康伸（編）身体像とこころの癒し　岩崎学術出版社 159–164

砂田良一（1979）．自己像との関係からみた自我同一性　教育心理学研究 27（３），215–220

鈴木貴美子・長江美代子（2012）．大学生の友人関係のありかたと自我同一性の発達　日本赤十字看護大学紀要 ７（1），133–144

滝沢美千代（1994）．思春期・青年期の発達心理　伊藤隆二・橋口英俊・春日喬（編）思春期・青年期の臨床心理学　駿河台出版 1–38

若島孔分・都築誉史・松井博史（2005）．心理学実験マニュアル–SPSS の使い方からレポートの記述まで–北樹出版

鷲岳覚（2006）．女子学生の心理社会的発達課題と風景構成法 日本パーソナリティ心理学大会発表論文集（15），86–87

山中康裕（編）（1984）．中井久夫著作集 別巻 風景構成法　岩崎学術出版社

（平成28年１月６日　受理）

附記：本論文は，作元の卒業研究に斎藤が加筆したものである．したがって，本論文の文責はすべて斎藤にあるが，研究のためのデータ収集などのあらゆる努力は作元に依拠する．作元による調査に協力してくれた愛知学院大学と椙山女学園大学の学生諸氏にお礼を申しあげます．ありがとうございました．

Journal of the Institute for Psychological and Physical Science, Vol. 8, No. 1, 89–97, 2016

Relations between the person and "self" in Landscape Montage Technique and the sense of identity–confusion in adolescents

Shiho SAKUMOTO, Makoto SAITO

Abstract

The purposes of this study were to examine what relations the degree of identity formation/confusion of youth has with the some indexes in the Landscape Montage Technique (especially the placement of a person). Our hypotheses were as follows. 1) The adolescents who form their identity well would place themselves more clearly in the depicted landscape. 2) The adolescents who form their identity well would more concretely picture a person in the landscape. 3) The adolescents who depict their landscape with good impressions would show lower scores of identity confusion.

51 students in a university pictured the Landscape Montage Technique and responded to the identity confusion questionnaire. Then the impressions of their pictures were scaled from the standpoints of integrity and plenitude.

The results were as follows. The hypothesis 2) and 3) were supported, but the hypothesis 1) was not supported. 2) The students who form their identity well clearly pictured the incarnated person with a colored flesh and body. On the other hand, the students who had some identity confusion drew the person as a colored stick-figure. 3) The students who were able to show the integral and plentiful impressions of their landscapes could form their identity well. These results suggested that the adolescents with some established identity were able to integrate the "person" as their self into their inner world much more concretely and plentifully. On the other hand, the adolescents with some identity confusion might have difficulty placing the poor stick-self into their uncertain inner-world forcefully with a color.

1) Regardless of the degree of identity formation many students in this study did not place their self in their depicted landscape. The adolescents in this study generally might firstly feel some hesitation of placing themselves to their own landscape concretely because they had difficulty committing themselves to their own inner world. Thinking thus, it would be suggestive that through our examining of the person and self in LMT we could realize their ego-strength in the sense of their taking an adequate distance against overwhelming tasks from their inner world.

Keyword: Landscape Montage Technique, persons in the depicted landscape, "self" in the depicted landscape, Identity confusion questionnaire, adolescence